

言語活動の充実を目指した新聞活用

伊丹市立荒牧中学校 校長 難波 重之
教諭 秋山 宏之

1. はじめに

本校では「意欲を持って学習に取り組ませる」ことが生徒指導上の課題を解決する手立てとなると考え、「授業が楽しい」と実感させる場づくりと、そのための教師の手立てに焦点を当てて授業研究に取り組んでいる。しかし、基本的な学習内容の定着が十分ではなく、特に自分の考えや思いをまとめたり、書いたりすることを苦手とする生徒が多い。そこで、終礼の10分間を学習タイムに設定し、「書く」力を育てることに重点を置いた学習とし、行事の後には新聞作成に取り組んだ。その3年間の成果を述べる。

2. 取り組み

(1) 「言語修得道場」について

- ① 毎日の終礼の10分間（月～金曜日 15:35～45）を終礼学習の時間とする。
- ② 週初めの月曜日に朝日新聞の「天声人語」を用いたワークシートを使用する。
- ③ 金曜日にワークシートを回収し、各クラス担任が点検し、次の週の月曜日に返却する。（担任によってはコメントを記入して返却している）
- ④ 生徒の取り組み段階に合わせて、「書き写す」「分からない語句を調べる」「文を要約する」「意見文を書く」の4段階に設定し、1週間で「意見文を書く」ところまでを目標に取り組ませる。
 - ・ 1年次は「書き写す」「分からない語句を調べる」
書くことが苦手な生徒が多く、板書をノートに写すにも時間がかかるため、「早く丁寧に書く」に重点を置いた。
 - ・ 2年次は「書き写す」「分からない語句を調べる」「文の要約」
書くスピードが上がった生徒が多かったため、文の要約に取り組んだ。要約は200字の原稿用紙に書かせた。
 - ・ 3年次は「書き写す」「分からない語句を調べる」「文の要約」「意見文」
事柄に対して自分の意見を持つことに重点を置いた。
意見文は400字の原稿用紙1枚に収まるように書かせた。

(2) 新聞を書く

3年間、新聞作成に取り組んだ。

- ・1年次、林間学舎後、新聞を作成

班(6人)で1枚の新聞を作らせ、1人一つ林間学舎で体験し学んだことについて記事を書かせた。生徒たちは、字数を制限されながらも、読みたくなる記事の工夫を班で話し合い、挑戦していた。



「林間学舎新聞」

- ・2年次、トライやる・ウィーク後、新聞を作成

トライやる・ウィークでの職場体験を基に1人1枚新聞を作成した。実体験を記事にするのは難しく、感想文になりがちなところが多々あった。

また、記事の割り振りやレイアウトにもこだわらせ、総合学習の時間を中心に10時間程度を使い、仕上げさせた。このときに、実際の新聞を使いながら、レイアウトの仕方や見出しについて参考にしながら新聞をまとめていった。

- ・3年次、修学旅行(長崎)後、新聞を作成

修学旅行では、記事を書くために取材を行うことにし、総合学習の時間に新聞を用いて、記者がどのような角度で取材をしているのかを学んだ。実際に2015年3月5日、毎日新聞神戸支局の後藤豪記者から、「修学旅行新聞の作り方」「取材の仕方」について話を聞いた。感想文に終わらせないため、「人」にスポットを当て、過去・現在・未来に分けるなど、書き方の秘けつを教えていただいた。



「修学旅行新聞」

・朝日新聞阪神支局の吉岡一支局長による記者派遣事業

また 2016 年 2 月 24 日には、朝日新聞阪神支局の吉岡一支局長が、「新聞の作り方」と題して、主に自らの海外特派員時代の貴重な経験を次のように語ってもらった。

ニュースはなぜ必要か。阪神・淡路や東日本大震災のような全てが破壊される事態は、いつまた発生するかもしれない。そんなとき、自身や家族の命をどう守るか、情報収集力が鍵となる。実は東日本大震災の際、日本より米国の方が早く危険性を察知、空母レーガンほか 7 隻の船舶を東北沖に集結させていた。在日米国民を救い出すためだ。ヒラリー・クリントン国務長官（当時）が急きょリビア行きを取りやめ、「福島危機」に立ち向かおうとした事実を知った瞬間「危ない」と直感した。まさに身を守る情報だ。

それ以前、4 年余り、エジプトの首都カイロに滞在して中東取材に携わったが、まさに戦争ばかり。戦時国際法を無視した、非戦闘員への空爆を世界世論に訴えるため必死で写真を撮った。多数のジャーナリストが戦地にやって来る。死の危険を冒してまで戦取材にこだわるのは、惨状を広く発信するためだ。記者たちは力の限り、暗部をえぐる情報を捉え、新聞を作っている。



「新聞記者派遣」

3. 成果と課題

成果

「言語修得道場」

①書くスピードが上がった。

また、書くことに関して抵抗感がなくなった。

②分からない語句がある場合は辞書で調べるため、語彙力が上がった。

③要約する力が身に付いた。(何回も文章を読むため、読むことに対しての抵抗もなくなった)

④時事的な内容の記事を取り上げるため、社会的な視野が広がり、世の中の動きに関心を持つ生徒が増えた。

⑤意見文を書くことによって、自分の思いや考えを表現できるようになった。

コミュニケーション能力が向上した。

「新聞作成」

①各社の新聞を参考にしながら、記事の書き方や、レイアウトの仕方などを工夫しながら作成できた。

②新聞作成において、基本的なルールを確認しながら、割り付けを行い、囲み記事の書き方などを実際の新聞を見ながら作成できた。

③学年ごとに目標を定め、学年が上がるにつれてレベルの高い新聞が作成でき、生徒も新聞の出来が良くなっていることを実感できた。

「新聞記者派遣」

①記事の書き方やレイアウトの仕方について学ぶことができ、記事を書くときのポイントや、記事にしやすい内容など、苦手意識の強い生徒には非常に分かりやすく、取り組みやすい内容であった。

②取材の仕方を学んだため、3年生の「修学旅行新聞」では、現地取材を基に記事を作成できた。

課題

書くことに関しては、抵抗が徐々になくなってはきたが、自分の思いや考えを表現することに関しては、まだまだ苦手とする生徒が多く、コミュニケーション能力を高める必要がある。また、日々の授業でも新聞活用の場面を増やし、社会に目を向け、興味を持たせる必要性がある。新聞を購読している家庭が少ない本校では、教師が意図的に活用する場面を増やしていく必要があった。